

## イネ紋枯病の今年の発生と来年に向けた対策

イネ紋枯病は、ここ数年高温の影響で発生が多くなってきています。7～9月に高温で降雨量や降雨日数が多いと発生が多くなり、多発すると減収や品質の低下を引き起こします。

今年は7～8月の気温が平年より高かったため、8月下旬には県内の広い範囲で発生が確認され、平年よりやや多い発生(病虫害発生予報10月号 p9参照)となりました。

前年の被害株の稲わらや雑草が、感染源となり病気が広がるため、毎年同じ圃場で発生しやすい傾向があります。今年発生の多かった圃場や例年発生の多い圃場では来年の作付けに向けて注意が必要です。

### 病徴

はじめは下位葉鞘に病斑ができ、発病株が次第に水平方向に増加。その後、出穂期近く～出穂後から病斑は上位の葉鞘へ進展(垂直進展)第3葉鞘より上位に病斑がみられるほど減収が大きくなり、強風雨や台風などで株が倒伏すると更に被害が甚大となる。



写真1 病斑拡大図

(写真1, 2: 病虫害防除所)

### 伝染経路

被害株にできた菌核→収穫後、被害株に形成された菌核は圃場で越冬→翌年の代かき時などに田面水に浮上→移植されたイネ株に付着→発病に適した温度条件になると菌核から菌糸を伸ばし株元に感染→6月下旬～7月上旬頃から発病

### 多発条件

密植や多肥栽培の茎数過多のイネで発病しやすい。  
7～9月の高温や多雨で発病が拡大  
(一度多発生した圃場は次作でも発病しやすい)



写真3 紋枯病が多発した圃場



写真2 紋枯病の病徴

### 防除のポイント

- 1. 防除時期:**
  - ①育苗期: 今年多発生した圃場や毎年発生している圃場は箱施用剤の使用も有効。
  - ②幼穂形成期～乳熟期: 発病後はなるべく早く、出穂前までに防除するのが効果的。発病の確認と早期防除を徹底する。出穂後に発病好適条件が続くと病斑は上位に進展するので、追加防除が必要。
- 2. 薬剤散布時の注意:** 病斑は水際に近い下位葉鞘から現れ、次第に上位葉鞘に進展するため、薬液の散布は下位葉鞘にまでかかるよう丁寧に行う。その際は、**収穫前日数に注意し、周辺のほ場に飛散しないようにする。** 播種機を使用して育苗箱に施用する場合は、使用量をよく確認する。
- 3. 栽培管理:**
  - ①代かき後 に浮上する菌核をワラなど植物残渣とともに除去する。中干しを徹底して根張をよくし、適正な茎数の確保に努める。
  - ②出穂後 は間断灌水(入水後は自然落水しながら2～3日湛水し、落水後は田面が湿っているうちに再び入水するサイクルを繰り返す)を継続する。
  - ③湿田で発病が広がっている場合は、収穫期の落水を収量や品質に影響しない程度で早めに実施する。
  - ④2～3年ごと のプラウ耕による耕土の反転なども有効である。

写真4 紋枯病の菌核

表1 紋枯病の主な防除薬剤

(令和6年10月15日現在)

薬剤名	希釈倍数	使用時期/使用回数	分類
エパーゴルフオルテ箱粒剤	育苗箱(30×60×3cm 使用土壌約5L) 1箱あたり50g	は種前/1回	I:4A F:7とP03
稲大将箱粒剤	育苗箱(30×60×3cm 使用土壌約5L) 1箱あたり50g	は種時(覆土前)～移植当日/1回	I:UN F:7とP03
フルスロトル箱粒剤	育苗箱(30×60×3cm 使用土壌約5L) 1箱あたり50g	は種時(覆土前)～移植当日/1回	I:28と4E F:7とP03
ブーンレパード箱粒剤	育苗箱(30×60×3cm 使用土壌約5L) 1箱あたり50g	は種時(覆土前)～移植当日/1回	I:28 F:7とP08
バリダシン液剤5	1,000倍	収穫14日前まで/5回以内	F:U18
モンカットフロアブル	1,000～1,500倍	収穫14日前まで/4回以内	F:7
モンセレンフロアブル	1,500倍	収穫21日前まで/4回以内	F:20
モンガリット粒剤	3～4kg/10a(湛水散布)	収穫30日前まで/2回以内	F:3

注1) ドローン等の無人航空機または少量散布専用ノズルを装着した乗用型散布機を用いる場合は、それぞれの農薬使用基準を遵守して使用してください。  
注2) 粒剤の処理は田水深3cm以上の湛水状態で行い、ムラなく均一に散布し、少なくとも3～4日間は湛水を保ち、7日間は落水やかけ流しを行いません。  
注3) 分類欄には、IRACとFRACコードを記載しました。同一分類(コード)は作用点が同じなので、連用は避けてください。

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 News は J A 全農いばらきホームページでもご覧になれます。